

戦後70周年に思う

西羽 晃

暑い夏になると、1945（昭和20）年の夏を思い出す。当時の私は国民学校（現在の小学校）3年生だった。前年7月まで神戸市灘区に住んでいたが、強制疎開で立ち退かされ、六甲山の北側の山麓である有馬郡有野村唐櫃（現在は神戸市北区）へ一家を挙げて引越した。当時の神戸市内から僅かに離れているだけだったが、純農村であった。47年4月に桑名へ引越すまでの僅かの期間だったが、農村の生活を見聞できた貴重な体験である。

45年の春から夏にかけて神戸空襲の音と光を六甲山越しに聞き、眺めていただけで、空襲の直接体験はない。当時の少年は将来は「兵隊さん」となり銃を持って「鬼畜米英」（鬼のようなアメリカやイギリス）を倒すことを当然のことと教育されていた。軍隊に入ると、自分で何もかもしなければならぬと、ボタンの付け替えや、靴下の破れの修理も母親から教えられた。

ところが45年8月15日正午、天皇陛下の玉音放送があった。雑音だらけで意味は聞き取れなかった。その後の解説で日本が負けたことを知った。「日本は負けない」と思っていたのに。敗戦後の教育は一変した。教科書にある軍国主義の言葉は墨で黒く塗りつぶした。今まで戦争を賛美していた教師は、戦争を否定するようになった。戦中も食糧難だったが、戦後の食糧難はさらにひどくなった。米の弁当はとても無理で、蒸かしたサツマイモが多かった。ひもじい毎日だった。着るものも手に入らなくて古いものを継ぎはぎしていた。



1945年空襲にあった桑名。春日神社前から西北を望む
前方の山は多度山、左手の四角い建物は大垣共立銀行

戦争とは「兵隊さん」だけでなく、国民全体も生存の危機に脅かされるのである。その反省の上に立って、48年5月日本国憲法が發布され、日本は戦争をしない国であることを世界に示した。

桑高2年生（53年）の夏休みに、私は『原爆の子』（岩波書店）を読んだ。只でさえ暑いのに、原爆の放射能に焼かれて水を求める姿を知り、私は原爆の恐ろしさに慄いた。当時の桑高では毎年弁論大会があった。その年の弁論大会で私は「原子雲の流れる果てに」と題して話した。内容は忘れたが、原爆反対を訴えたと思う。表彰を受けた覚えがないから、入選はしなかったのだろう。

私は戦後に桑名へ引越してきたので、空襲で焼ける前の桑名を知らない。大学時代から桑名の郷土史を研究しているが、明治維新前の桑名、第二次世界大戦以前の桑名は、大きなテーマである。

私は友人たちと「くわな戦争を語りつぐ会」を結成し、桑名空襲の資料・体験記を集めた『消えない夏の日』を1985年に、『桑名の空襲』を1993（平成5）年に発行した。他の仲間たちと朗読劇「この子たちの夏」（1993年）、合唱「ぞう列車がやってきた」（1995年）の公演をも行った。

また桑名しるべ石勉強会で『桑名の戦争遺跡』を2012（平成24）年に発行し、戦争の悲惨さを訴え、再び戦争の惨禍に遭わないように願った。しかし、昨今の政治情勢は過去の歴史を顧みず、日本を戦争に巻き込むような動きがあることを深く憂慮している。

備考：『消えない夏の日』、『桑名の空襲』は売り切れで在庫はない。『桑名の戦争遺跡』は在庫があり、ご希望の方には@800円（消費税・送料込み）でお分けします。西羽（nishiha123@beige.plala.or.jp）までお申し出ください。